
Cross Border Learning Fes. 2026

Short Summary

－振り返り

■ 2026テーマ：偶発的な学び

2026年9月5日 九段会館

11

セッション

230

参加者数（名）

39

登壇者（名）

20

Crew（名）

Cross Border Learning Fes. 2026

Contents

－目次

01 ご挨拶 P.3-4

Cross Border Learning株式会社 一色 顕

02 *Session Summary* －セッションサマリー P.5-13

3会場・11セッションのタイムテーブル
この場に残った言葉・参加者のNo.1キーワード／全セッションの記録

03 *Comments* － アンケートコメント P.14-17

アンケートコメント（抜粋）

Cross Border Learning Fes. 2026

01. ご挨拶

“偶発的な”「混じり合い」と「学び合い」への誘い

コロナが明けて大規模イベントの実施に不安がなくなったことでスタートしたCBL Fes.も今年で3回目。今年は、社名にも掲げているキーワード“Learning”、“偶発的な学び”をテーマにしたイベントとしました。

昨年のFesは最終セッションをお願いした瀬祭の桜井会長に、懇親会の日本酒まで提供していただき大盛況でした。そのプレッシャーもあり、今年はこのテーマでイベントが盛り上がるのだろうかという不安に駆られました。登壇者の方の日程が合わず、企画が進まない焦りもありました。最後のプログラム「20名のファシリテーターのもとで行う参加者全員でのダイアログ」は本当に成立するのか？という不安もありました。実際にイベント企画をオープンにした後、ある常連の参加者から「ちょっと今回の企画、地味じゃないですか？」と突っ込まれたりもしました。

全ての不安は杞憂に終わりました。申込者、参加者とも過去最高を記録。会場の盛況感はもちろん、懇親会の熱気も昨年よりアルコールが少なかったにも関わらず、全く劣らないものでした。運営もかつてなくスムーズに進みました。20名のファシリテーターの方によるダイアログは大変豊かな時間になりました。

この成功を生み出してくれたのは、まず、今回のFes.の運営を陰で支えてくれたCrewという仲間たちの存在。惜しみなくご自身の経験や学びを語ってくれた登壇者のご協力。そして、豊かな場、時間づくりにご協力いただいた参加者の方々のおかげです。本当にありがとうございました。

日々の仕事をしながら、このイベントを企画・準備していくと、時々、ちょっとだけ折れそうな自分達もいます。

登壇者の加藤理啓さんから、こんな言葉を教えてもらいました。『「楽」という漢字の読み方は「たのしい」か「らく」のどちらか。どちらかを選ぶと、もう1つは選べない。つまり「たのしい」を選ぶと、それはもう、「らく」ではない道を選んだということ』
CBL Fes.は「らく」ではないけれど、「たのしい」という道を選んでいたのだな、と改めて勇

気をもらいました。

黒川公晴さん・今村健一さんとの対話のなかで「**偶発性とは、個々人の必然の行動が掛け合わり新しい事象が生まれることかもしれない**」というメッセージが立ち上がりました。年齢・業界・職業・立場・国籍…様々なボーダーを越えて混じりあうことは偶発性そのもの。混じり合いではなく、対立ばかりが目立つ昨今の社会。だからこそ、混じり合い、偶発的な学びが起こる価値をつくりだしていきたい、と改めて気づきました。

経営者の大先輩である佐藤浩也さんは、MBOして会社を再出発させたときから「**僕らが仲間と積み上げてきた何かを、DNAのようなものとして次世代に残したい**」と考え、**会社を運営してきた**と語られました。CBLという会社がどうなるかはともかく、多くの人と紡いできているFes.のDNAを広めていきたい、次世代に繋いでいくのが私たちの願いです。

混じり合い、学び合いの場を提供すると言いながら、最も学ばせてもらっているのは私たちなんだなぁと改めて実感したFes.でした。

田貝雅和さんから、こんな考え方をいただきました。『**コミュニティはつくるものというより、つくられるもの**』。CBL Fes.をきっかけに、つながった人たちによって、新たなコミュニティがつくられていく。そんな事がおこってくれば、主催者として、こんなにうれしいことはありません。

そしてまた来年、2027年9月11日の土曜日、同じ九段会館で、CBL Fes. に新たな仲間と共に集まれることを願っています。

Cross Border Learning株式会社
代表取締役 一色顕

Cross Border Learning Fes. 2026

02. Session Summary

ーセッションサマリー

当日プログラム
全11セッションの記録

SCHEDULE

ホール：真珠（3F）

09:10-10:30 【TS-1】

組織の枠を越えて活性化する
**コミュニティの
創り方と続け方**
T: 鄧雯氏・田貝雅和氏
F: 一色顕

10:45-12:05 【TS-2】

計画か？偶発か？
企業経営者の判断軸
T: 佐藤浩也氏・加藤理啓氏
F: 一色顕

Lunch 

12:50-14:10 【TS-3】

**クリエイティビティを
高める偶発的な学び方**
デザイナーの実践から学ぶ
T: 門田慎太郎氏・今井真一氏
F: 一色顕

14:30-15:50 【WS-4】

若者100人とAIで行う
読書対話セッション
**今いるメンバーで
『大金星』をあげる
チームの法則**
T: 仲山進也氏
F: 一色顕

会議室：302

09:10-10:30 【WS-1】

実践！アイスブレイキング
**この場の人たちと
つながろう！**
T: Nathan DeWitt 氏
Jan Waningge 氏
F: Gareth Monteath

10:45-12:05 【WS-2】

偶発的な学びを引き起こす
**ヒトからの学び方
実験室**
T: 永戸考氏・森田真里子氏
F: 三木絢帆

Lunch 

12:50-14:10 【WS-3】

偶発的な学びを得るための
**「AIとの付き合い方」
実践編**
T: 竹中紳治氏
F: 三木絢帆

14:30-15:50 【WS-5】

都会で働く私にもできる、
**地域との「いい距離感」
のつくり方**
T: 中田学氏
F: 前田亮

会議室：301

Lunch 

12:50-14:10 【TS-4】

**勝ち負けの世界を生きた
アスリートが
引退後に生きる世界**
T: 金正奎氏・曾田雄志氏
F: 富岡鉄平

14:30-15:50 【WS-6】

**仕事を「面白がる」
動機をつくれるのか**
探究的学びのプロと探究する
T: 長井悠氏
F: 三木絢帆

16:10 - 18:00 ホール：真珠（3F）

200名でチャレンジ！
偶発的オープンダイアログセッション
T: 黒川公晴氏・今村健一氏
F: 一色顕



懇親会

1)【TS-1】組織の枠組みを越えて活性化する「コミュニティの創り方と続け方」

T: 鄧 雯 氏・田貝 雅和 氏 / F: 一色 顕

神田でスタートアップコミュニティを立ち上げた鄧さんと、京都を拠点に偶発的なつながりを生み出す田貝さんを迎え、コミュニティのつくり方と続け方を考えました。主催者の熱量なしにコミュニティは始まらないし、続かない。一方で、主催者の意図や成果を求めすぎれば、参加者の居心地や主体性、偶発的なつながりが失われてしまう。コミュニティは「つくるもの」なのか、「生まれていくもの」なのか。その微妙な関係の間にある、熱を注ぎながらも場や参加者をコントロールしようとしない、というコミュニティとの繊細な関わり方の大切さが見えてきました。



この場に残った言葉

『コミュニティ』を創ることに意識を置くことより、何を一緒に経験したいのか、どんな問いを共有したいのかを先に置く
田貝 雅和 氏

コミュニティとして、“ちょうどいいサイズ”の問い、狭すぎず、広すぎず、顔が見える範囲での問いを立てることが大事
田貝 雅和 氏

コミュニティを立ち上げた人の思いとかモチベーションっていうのは、すごく大事。その人がいるから長続きする
鄧 雯 氏

事業や法人のロジックだけでガチガチに固めるのではなく、情熱を持った仲間同士が純粋な『思い』を持ち寄ることで、組織の枠を超えたコミュニティへと自然に広がる。
鄧 雯 氏

参加者が選ぶ セッションのNo.1キーワード

- ・ちょうどいいサイズ感
- ・ゆるくつながる、ゆるく続く
- ・意図と偶発の出し分け
- ・「継続しない」を目的にする

- ・お金のにおいがしないコミュニティ
- ・建前と本音、組織とコミュニティ
- ・問いのサイズ感
- ・テーマは「○○の○○」+意外性

2)【WS-1】この場の人たちとつながろう！

T: Nathan DeWitt 氏・Jan Waninge 氏 / F: Gareth Monteath

ネイトさん・ヤンさん・ギャズさんの進行で、知らない人との会話を始め、広げるための「筋トレ」に挑戦しました。声をかける、相手の言葉を拾って問いを深める、会話の輪に加わるなど、実践を重ねながら、人とつながる際の緊張やためらいに向き合いました。偶発的な出会いを学ぶにつなげる力は、生まれ持った社交性だけで決まるものではありません。相手の名前を呼び、関心を持って話を聴く、感謝を伝える。その小さな働きかけが、次の会話への扉を開きます。また、輪に入る人の勇気だけでなく、迎える側が入りやすい空気をつくることも大切です。出会いを待つだけでなく、自分から一歩踏み出し、誰かの一歩も迎え入れる。偶発的な学びの入口を、ともしつくる感覚を体験する時間となりました。



この場に残った言葉

CliftonStrengths®で私の34位は『社交性』。本当のパーソナリティならこんな仕事もしていない。アイスブレイクは筋トレで解決できる
Gareth Monteath 氏

会話を深めるには「始める → 広げる（相手からプレゼントをもらう） → 拾う（発言に触れる） → もう一歩尋ねる（背景や意図を深掘る）」
Nathan DeWitt 氏

対話を起こすポイントは3つ。①自分から少し話す（ほんの少しの勇氣）②相手の言葉を受け止める（相手の発言の中に『プレゼント・贈り物』がある）③何が生まれるか見てみる（これこそが『偶発的』な学び）
Jan Waninge 氏

みんな「声かけたら迷惑かな」「逃げたいな」とドキドキしている。だから大体大丈夫！！
Jan Waninge 氏

参加者が選ぶ セッションのNo.1キーワード

- ・まず「こんにちは、○○です」
- ・名前のリサイクル
- ・自己開示は自分から
- ・相手からのプレゼントを受け取る

- ・気をつかいすぎなくていい
- ・話すより、話してもらう
- ・去り際は「感謝+名前+また後ほど」
- ・みんな同じことを考えている

3)【TS-2】計画か？偶発か？企業経営者の判断軸

T: 佐藤 浩也 氏・加藤 理啓 氏 / F: 一色 顕

長年にわたり企業経営の最前線を歩んできた加藤理啓さんと佐藤浩也さんを迎え、二人のキャリアをたどりながら、「計画」と「偶発」の間で、何を軸に意思決定してきたのか、紐解きました。予期せぬ出会いや出来事が転機を生む一方、その先の道を決めていたのは、自分なりの価値観やあり方、そして進む意思でした。**未来を正しく予測して計画することが難しい時代だからこそ、「何を実現したいのか」「自分はどうありたいのか」を判断の軸にする。偶発的な出来事に流されるのでも、計画に縛られるのでもなく、自らの意思で意味を与え、次の一步を選んでいく。**不確実な時代に、私たちは何を判断の軸として持つのか——そんな問いが残りました。



この場に残った言葉

海外で『あなたは何者か』『日本はどんな国なのか』と問われる経験を重ねるなかで、日本の学びや子どもの教育というテーマへの関心が立ちあがってきた

加藤 理啓 氏

MBOLして起業した時から、自分の名前を組織に残さず、自らの美学や積み上げてきたDNAを次世代へ継承するフォーメーションを考えていた

佐藤 浩也 氏

会社として最適な、自分達なりの成長スピードがある。ただし、トップはそれを緩めてはいけない。ということをもっと学んだ

佐藤 浩也 氏

ラクな道か、タノしい道か、選べるのはどちらかだけ。『ラク』な道を選んでいる限り、本当の『楽しさ』は味わえない

加藤 理啓 氏

参加者が選ぶセッションのNo.1キーワード

- ・ Scale Out（量）と Scale Deep（質）の両立
- ・ 質・スケール・次世代／真ん中へ行け
- ・ 成長はマスト、組織のゆるさはダメ
- ・ 「楽しい」は「ラク」ではない

- ・ 厳しい道こそ乗り越えて楽しい
- ・ 仕事は楽しくしたい
- ・ 合理性より自分の価値観・志を軸に
- ・ 計画より不確実性、DNAを次世代へ

4)【WS-2】ヒトからの学び方実験室

T: 永戸 考 氏・森田 真里子 氏 / F: 三木 絢帆

公認会計士であり学校法人の理事を務める森田さんと、“BBQ弁護士”として幅広く活動する永戸さんを迎え、それぞれの多様なキャリアを手がかりに「ヒトから学ぶ」とは何かを探究しました。異質な文化や価値観、想定外の出来事を面白がって受け入れること。そして、目の前のことに詰め込みすぎず、あえて立ち止まる「余白」を持つことが、新たな問いや発想を生み、学びを深めていく。参加者もお二人に問いを置きながら、その問いが生まれた自分自身の価値観や前提に目を向けました。相手から答えを得るのではなく、相手との対話を通して自分の見方が更新されていく——そんな「考えさせられる学び」を体感する時間となりました。



この場に残った言葉

人間から『余白』を取ると、思考や考えることが止まる。余白によって、思いつきもしなかったアイデアや気づきが生まれる

森田 真里子 氏

予定調和や『粹』に収まりきっていない生き方の方が面白いし、居心地がいい

永戸 考 氏

人から学ぶとは、人を通じて『自分はどうなんだろう』と違和感や捉え方の変化を生み出す

参加者

（登壇者への問いかけを通じて、）自分の内なる葛藤を深掘りし、もがいていること自体の意味を捉え直す

参加者

参加者が選ぶセッションのNo.1キーワード

- ・ 余白をつくる
- ・ 粹をはみ出す
- ・ 本気の遊び
- ・ 「好き」を土台に

- ・ 予定調和から離れる
- ・ 感覚を大事にする
- ・ 人の間（あいだ）から学ぶ
- ・ 自分の得意に気づく

5) 【TS-3】クリエイティビティを高める偶発的な学び方～デザイナーの実践から学ぶ～

T: 門田 慎太郎 氏・今井 真一 氏 / F: 一色 颯

デザイン領域に長く関わり、チームを率いる門田さん、今井さんを迎え、「デザインとは何か」「クリエイティビティは意図的に高められるのか」を考えました。デザインとは「最適化」という定義で良いか？という問いに、「**デザインとは、合理性を超えた愛着や情緒的な価値の創造と実行といった領域まで含む、もっと動的なものではないか**」という仮説が立ち上がってきました。また、二人はクリエイティビティをどう高めてきたのか、クリエイティビティが高いチームは計画的に創れるのかという問いに対して、**あえて制約や意図を置いて、偶発的な学びや実践の機会を意図的に創る、クリエイティビティを偶然や才能に委ねず、日常の行動ルーティンや組織の中に意図的に小さな仕掛けを埋め込んでいく**、といったお二人に共通した考えに、クリエイティブの本質を学びとることができました。



この場に残った言葉

デザインをあえて定義するなら、ある状況への違和感に気づき、その状況を良くするための計画を立て、実行する一連の流れ
門田 慎太郎 氏

デザインの善し悪しを自分のセンスや好き嫌いで判断せず、『このプロジェクトで何を目指し、何を解決すべきか』を言語化して客観的な視点で評価する
門田 慎太郎 氏

自分の中の“規律性”や“戦略性”という資質を知ったことが、クリエイティビティを発揮していく上で自分らしい固有のルートを知ることにつながった
今井 真一 氏

80点や90点の完成度に達したら、あえてそれをゼロリセットする。コンフォートゾーンを意識して破壊していかないと、真の創造は生まれない
今井 真一 氏

参加者が選ぶセッションのNo.1キーワード

- ・計画的に偶発性を仕込む
- ・意図して異世界・外に出る
- ・思考のComfort Zoneをあえて壊す
- ・自己完結・コントロール下から脱出
- ・ふだんと違う行動でループを切る
- ・違和感や他者との違いを受け入れる
- ・知識・経験の幅を広げ新結合を起こす
- ・創造性は誰でも発揮できる

6) 【WS-3】「AIとの付き合い方」実践編

T: 竹中 紳治 氏 / F: 三木 絢帆

株式会社LX DESIGN代表取締役の竹中さんを迎え、AIを効率化のための「自分の手足」ではなく、自分にはない視点をもたらす相手として捉え直しました。竹中さんの活用事例をもとに、皆さんでAIを交えたグループ対話を実践。思い通りにいかないことも含め、AIとの可能性を試行錯誤しました。AIから受け取った違和感や問いに対して、自分の価値観や大切にしたいことを手放さず、何を選び、何を委ねるかは人間が担う——そうした試行錯誤の中で、自分や組織の前提が揺さぶられ、偶発的な学びが生まれていく。AIとの対話を実際に体感しながら、ともに成長するための境界を問い直す時間となりました。



この場に残った言葉

AIは自分の偏りや盲点を気づかせてくれる『客観的な視点を持った相棒（仲間）』である

よく『AIを育てなければいけない』と言われるが、本当に育てなければいけないのは自分自身の方である

AIがどれだけ多角的な視点や分析を語ってくれても、それを受け止めて『どう行動するか』を最終決定できるのは人間だけ。AIの意見に吞まれず正しく選び取るための『視点』や『フレームワーク』を自分の中に持ち続けることこそが、人間に残された一番大事な役割である

参加者が選ぶセッションのNo.1キーワード

- ・AIは仲間・相棒
- ・AIは別の視点をくれる
- ・AIからFeedbackをもらう
- ・AIと人の意図的な使い分け
- ・視点を増やす／好奇心
- ・最終判断は人間、判断軸を持つ
- ・未知の体験ができるのがすばらしい
- ・超速で進む世界を体感

7)【TS-4】勝ち負けの世界を生きたアスリートが引退後に生きる世界

T: 金正奎氏・曾田雄志氏 / F: 富岡鉄平

元ラグビー日本代表の金正奎さんと、元プロサッカー選手の曾田雄志さんを迎え、富岡鉄平さんの進行で、明確な勝敗のある競技の世界から、正解も終了の笛もない世界へ踏み出すことを考えました。農業との出会いからラグビー以外の生き方を見つけた金さんと、引退後の学び直しや予想外の縁を通じて、教育やまちづくりへ活動を広げた曾田さん。お二人の歩みから見えてきたのは、**過去の実績や成功体験に自分を閉じ込めず、未知の世界で再び学ぶ姿勢**です。先の見通しや周囲の評価を求める前に、まず自分を整え、何に心が動くのかに目を向ける。その好奇心を頼りに人や機会と関わることで、思い描いていなかった生き方が開けていく。**キャリアの転換は、別の仕事へ移ることだけではなく、今の場所で見方を変えることから始まる**——偶発的な出会いを、自分らしい次の一歩へつなげるヒントを得る時間となりました。



この場に残った言葉

矢印を外に向けるのが大嫌い。相手を変えようとする事自体が難しい。人は変えられない、変えられるのは自分しかない。

金正奎氏

過去の栄光や実績が大きいほど手放しづらい。大切なのは、過去の自分すら疑って新しいものを構築する『アンラーン（Unlearn）』の勇氣。曾田雄志氏

セカンドキャリアで探す前に問うべきは、『今の自分、整ってますか？』ということ。内側が整っていれば、前向きな思考や次の挑戦につながる。金正奎氏

現役時代は『周りに無理だと言われても絶対なる』と道を切り開いてきたのに、引退が近づくにつれて計算や不安を理由にして、自分の『ワクワク』を抑え込んでしまう。曾田雄志氏

参加者が選ぶセッションのNo.1キーワード

- ・内側を整えることから始める
- ・出会い・人の縁を大切に
- ・偶発性は「行動」から生まれる
- ・起こること全てに愛と感謝
- ・心と身体のインナーウェルネス
- ・自分自身の好奇心を問い直す
- ・整えることで自己肯定感が生まれる
- ・予想外の出来事は捉え方次第

8)【WS-4】今いるメンバーで『大金星』を挙げるチームの法則

T: 仲山進也氏 / F: 一色 颯

『今いるメンバーで「大金星」を挙げるチームの法則』の著者・仲山進也さんを迎えて、AIを活用した読書対話を実施しました。書籍を読んだ人も、まだ読み切れていない人も、題材の本をテーマにAIと壁打ち。その壁打ちと自身の経験や問題意識をもとにグループで対話するという読書会のプロセスは、新たな学び方としての示唆に富んだものでした。チームにとって本当に怖いのは「対立」そのものではなく、言い合える関係がないまま対立してしまうこと。「人vs人」の対立ではなく、「私たちvs問題」にするためのフォーミングのプロセス、そのための心理的安全性が鍵である、というメッセージは、いきなり全員を変えようとせず、まずは少人数で成功体験をつくり、その熱を周囲へ広げていく。偶発的に集まった“今いるメンバー”と向き合うことが、組織全体の変化につながる道筋をつくる、といった、実践可能性の高いアドバイスを仲山さんからいただきました。



この場に残った言葉

よい対立は『私たち 対 問題』、よくない対立は『人 対 人』。

チームのメンバーはどんどん変わっていくのに、チームのルールや仕組みは変わっていない。今いるメンバーにあわせて、ルールや仕組みも、見直していく。

ストーミングは起こすものではない。このメンバーなら言っても大丈夫、と思えたとき勝手に起こるもの。

「全員でチームになってくださいね」とは一言も言っていない。まずは数人のチームでの成功体験を増やすことから。

参加者が選ぶセッションのNo.1キーワード

- ・ストーミングは起こすより自然に起こるもの
- ・心理的安全性があればストーミングは起こる
- ・ヘルシーな対立を恐れずに
- ・「人対人」ではなく「問題対私たち」
- ・グループからチームへ
- ・ストーミングが起こる環境をつくる
- ・チームビルディングは生き物・流動的
- ・誰をバスに乗せるか

9)【WS-5】地域との「いい距離感」のつくり方

T: 中田 学 氏 / F: 前田 亮 氏

福岡県古賀市の中田学さんと同市の人材・組織開発アドバイザーを務める前田亮さんを迎え、都市部で働きながら地域と関わる方法を考えました。地元では当たり前だった郷土料理「鶏すき」が、外から来た中田さんの目によって地域の特産品へと育った事例を手がかりに、あえて古賀市と関係のない皆さんが、シビックプライドを高めるアイデアを考えました。地域に関わることは「義務」や大きな社会貢献ではなく、自分の人生やつながりを豊かにする機会でもある。SNSをフォローする、地域の商品を買う、アイデアを届けるなど、今日の帰り道からできる小さな一歩が、地域との新たな「関わりしろ」になります。内側では当たり前すぎて見えない価値を、外から来た人の目が見つければ直す。そして、住んでいる人だけでなく、働く人や遊びに来る人も一緒に街の誇りを育てていく——地域にも自分にも無理のない「いい距離感」の可能性が見えてきました。



この場に残った言葉

外の目じゃないと気づけないことが、必ずある。地域はいつもそれを必要としている。

中田 学 氏

移住かゼロかではない。『関わりしろ』はいろいろある。

中田 学 氏

自分にとっての『いい距離感』とは何か。

前田 亮 氏

参加者が選ぶ セッションのNo.1キーワード

- ・シビックプライドは自分で選べるもの
- ・まず「いい街だよ」と言い続ける
- ・地方と関わることは義務ではなく楽しみ
- ・二拠点生活・二地域居住という選択
- ・外から来た目が地域の価値を見つける
- ・気軽な一歩から地域とつながる
- ・市長を身近に感じる「いい距離感」
- ・地域への愛着は人口規模に比例しない

10)【WS-6】仕事を「面白がる」動機をつくれるのか

T: 長井 悠 氏 / F: 三木 純帆 氏

タクトピア株式会社代表取締役の長井悠さんを迎え、探究的な学びの視点から、仕事やものごとを「面白がる」動機をつくれるのかを考えました。達成すべきことに接続し、何かを形にしなければと焦るあまり、相手の「面白がり」を置き去りにしてしまう——これは、教育現場でも仕事でも起こりがちな構造です。相手に好奇心を持ち、表に現れた感情の奥にある「譲れない願い」や熱を探ることは、難しさやもどかしさがある。しかし、すぐに成果へ導こうとせず、その熱と一緒に育てていくことで、本人さえ予想していなかった関心や学びが立ち上がる。人を「面白がらせる」のではなく、その人と一緒に「面白がる」。

偶発的な学びを生み出す関わりの出発点は、そこにあるのかもしれませんが。



この場に残った言葉

人間は自分の感情を裏切ることにはできない。
だから、探究の出発点は『Love & Hate (心がどう動いたか)』

長井 悠 氏

面白がっているとは、何かに没頭し続け、そのためのエネルギーが自分自身の中から自給自足で湧き出ていること。長井 悠 氏

限られた時間の中で何とかしなくちゃと、結局は『自分』が勝手に自分も相手も追い込んでいる

キーワードは『好奇心』。自分たちにはまだまだ知らない世界のことがいっぱいある。『興味』を持って、あの手この手で話を聞かせてもらおうと面白い。参加者

参加者が選ぶ セッションのNo.1キーワード

- ・感情First、感情から出発する
- ・「好き」に忠実／「熱」が起原
- ・面白がる力は伝播する
- ・「自分ごと」がある人の話は面白い
- ・自分の面白ポイントを言語化する
- ・共感しすぎると引き出せなくなる
- ・真の課題を引き出す問いを探す
- ・違いを楽しみ、一緒に興味を持つ

11) 偶発的オープンダイアログセッション

T: 黒川 公晴 氏・今村 健一 氏 / F: 一色 顕

Fes.の締めくくりは、壇上ではなく、参加者全員が主役となる大規模な対話に挑戦しました。ミネルバのリーダーシッププログラムで講師を務める3人によるオープニングトークの後、20名のファシリテーターが「問い」を持ち込み、くじ引きで偶発的に集まったメンバー同士での対話。途中で別のテーブルへ移動し、そこで得た視点を最初の場へ持ち帰ることで、問いと学びを交差させました。さまざまな意見や価値観が交差する場に身を置く、自らも語ることで、自分の考えをより強く肯定する。新たな考えや変化に触れ、視界が広がる。ちょっとした違和感や反発を覚えたことが、逆に自己の特性やこだわりの自覚に繋がる。オープニングトークで黒川氏・今村氏が語った、「自分が知らなかったことを知る」という偶発的な学びを、そして、それを引き寄せる「面白がり力」の可能性を、参加者全員で確かめる大きな社会実験となりました。



この場に残った言葉

相手の発言に対して5秒間の沈黙を意図的に作る（5秒ルール）。即座に言葉をかえずのではなく、沈黙の中で相手の言葉を丁寧に受け取る。たったこれだけのことが、対話の質を劇的に変えてくれる

今村 健一 氏

自分が完全にコントロールするのではなく、ただ流されるわけでもない。目的を持ちつつ、それをふんわりと保っておく。能動でもなく受動でもない、『中動態』の状態に自分を保つ

黒川 公晴 氏

「ファシリテータブル」であることを大事にする。ファシリテーターではない人も、その場と一緒につくろうとすることが、自分にとってもその場が豊かな場になり、豊かな時間が過ぎせる

一色 顕 氏



参加者が選ぶセッションのNo.1キーワード

好奇心

偶発性を大切にしたい

えいやっ

余白をつくる

対話から生まれる気づき

人は能力より相性、そしてメタ認知

面白がる能力

問い続けられる環境づくり

なんとかなる！

大事なものは素直さ

時間軸を変えてみる

信じること

異なる考え方、異なる言葉の意味をすり合う

自分次第

人は一人では生きていけない

問い×メンバーでの多様な学び

セルフパートナーシップ&余白

様々な視点に気づく

チームwAIで考える

意見の異なる人の話を聞く

振りかえりは大事

向上心・モチベーション

組織は個人によって成り立つ

仕事とプライベート

言語化しないリーダー

今の常識を覆す機会

心の声、カラダの声

手放す

平常心

ダサくない人

常識を否定する

「今」を生きましょう

予想外なことは人生で必ずおきる

偶発的に広がる会話

対話は対私

内省力をいかにつけるか

選択は必要投資

「えいや」連鎖

出会いのスパーク

小さな夢を叶え続ける

人は人に生かされている

最上位目標

ヒトを構成するもの（心・思い・感情）

自分の強みは自分次第

誰とでもどんなテーマでも語れる

「知ろうとする」って大事

対話のおもしろさに飛びこむ

※ 参加者の手書き付箋の言葉をそのまま掲載。20の問いごとに対話したため、キーワードは多方向に広がりました。

11) 偶発的オープンダイアログセッション

T: 黒川 公晴 氏・今村 健一 氏 / F: 一色 顕

01
黒川公晴

- ① リーダーシップは誰のものか？
- ② 「AI時代に必要な〇〇」で我々は何を確かめたがっているのか？

11
河西祐介

- ① 「動機」はどのように生まれ、誰のものなのか？
- ② 「非営利」vs「営利」それぞれの利点は何か？

02
今村健一

- ① ドラえもんをあなたの会社は採用しますか？
- ② 人生を一回だけやり直せるとしたら、本当にやり直しますか？

12
松尾和幸

- ① 今日、あなたがCBLの場にいたことで、何が生まれていたでしょうか？
- ② 今日1日を振り返って、これからのあなたにはもう必要ないかもしれない「当たり前」は何でしょうか？

03
墨健二

- ① 新たな一步を躊躇させるもの／乗り越えさせてくれるものは、どこからくるのか？
- ② 子育てに親はどこまで必要なのか？どこまで介入するのか？

13
今井隆二

- ① あなたが感じる「自分らしさ」とは？
- ② あなたが感じる「品位 (Integrity)」とは？

04
斉藤晴久

- ① 5年後、10年後、あなたはどこでどんな働き方をしているのでしょうか？
- ② 子どもにとって本当に必要な「探究」って何なののでしょうか？

14
川下俊輔

- ① 「人の強み」ってなんでしょう？
- ② みなさんが自組織に採用したい人ってどんな人？

05
上田和美

- ① 100年後の田舎はどうなってる？
- ② あなたの人生にとってのパートナーシップとは？（公私問わず、なんでもOK）

15
延原典和

- ① 理想のリーダーってどんな人柄？／信頼できるリーダーってどんな人？
- ② リタイア後をどう生きるか？

06
竹中紳治

- ① もし、明日から社長になったら何する？
- ② あなたにとっての学びとは？

16
前田亮

- ① 来年CBL Fesで登壇するとしたらどんなテーマにしますか？
- ② なぜあなたは学び続けるのか？

07
池田茜

- ① 話し方を学ぶことで、逆に失われると思うことは何か？
- ② キャリアにおいて大切なものが2つとも守れないとき、私たちは何を基準に選ぶのか？（子育てと仕事など）

17
井野岡大

- ① 公私（仕事とプライベート）の境って必要ですか？
- ② 現代の子ども達が学ぶべきことって何でしょう？日本の教育はそれが実現できるのか？

08
横山佳菜子

- ① 人が「えいやっ」と一歩踏み出す時、裏側で何が起きているのか？
- ② 人生最期の日、誰とどこで何を食べたい？

18
池内達宣

- ① 「失敗してもいい」は本当に正しいのか？
- ② 出世したい人は減った方が良いのか？

09
岡麻紀

- ① キャリア、成果のために「犠牲」になってしまったものってありますか？
- ② 「現状に満足・感謝すること」と「成長や変化を起こすこと」どう共存していますか？

19
富岡鉄平

- ① あなたの人生を変えた*予想外*は何んですか？
- ② もし、人生にもう1人自分を放てるなら、何をやらせたいですか？

10
櫻木友紀

- ① 「趣味」は何をもたらすのか？なぜ必要なのでしょう？
- ② 問い、問われることはどうやって鍛えられるか？

20
犬塚大輔

- ① 自分が呼吸するようにできる強みはなんでしょう？
- ② なぜ今の会社（仕事）をやめないのですか？

Cross Border Learning Fes. 2026

03. Comments

－アンケートコメント

0) Fes.全体

- ・初参加で不安もありましたが、**学び合う仲間がたったの数分でできたこと**は、心の余裕にもなり、楽しくカリキュラムに集中できたことが印象に残りました。
- ・私自身参加して、こんなに**頭をフル回転**させて学びを得られるとは正直思っていませんでしたし、それ以上に多くの「仲間」との出会いを得られたことが大きな財産です。
- ・参加されていた皆様の**熱量の高さ**、向き合う姿勢の前向きさなど、それだけで非常に気持ちが高揚し、場に対するモチベーションが高まりました。
- ・大企業、ベンチャー、教育関係、幅広いアンテナの高い方々いらっしやっていて、テーブルでの会話自体ですら学びでした。学びのレベルも高いので来てよかったと感じました。
- ・**偶発性**というテーマがとても素敵でした！CBLの社員総会！という感じがして、アイオープニングな場でした。
- ・セッションの幅の広さ、参加されている方の**多様性**、カジュアルでも学びの多い場。ユニークな場を作られていますよね。
- ・「対話するために対話する（対話そのものが目的）」に近く、あえて目的やゴールがないからこそ、各々が纏う役割や仮面を脱いで、生身の人と人として向き合えるのではと感じた。
- ・テーマ設定から具体的な内容まで、非常に考えさせられるセミナーでした。特に、参加者自身が自分の組織や仕事に置き換えて考えられる**余白**があり、受け身ではなく、自分自身の課題として考えることができた点が印象的でした！
- ・今自分が聞きたいプログラムを絞って**自由に参加できる**この仕組み自体が、改めてとても素晴らしいと感じた。
- ・欲を言えば、トークセッションはもう少し**対話の時間**があると、よりCBLらしいイベントになるのかなと思いました。

1) 【TS-1】組織の枠組みを越えて活性化する「コミュニティの創り方と続け方」

- ・今の時代、計画性より変化へ対応するための**状況判断**、観察からの意思決定の結果、それぞれのコミュニティが存在していると感じました。また、計画的に継続より「ゆるい感じ」と表現されていましたが、**都度都度の状況判断が持続の鍵**のように思っています。
- ・「AとBの距離と意外性を、少しずつずらしながら、ちょうどいい塩梅を探す」も一週間経過し残っております。コミュニティの構成メンバーの一人ひとりの顔が見えるし、同時に集まりでもある。世界が分断と言われている中、コミュニティは自分にとって一つのキーワードになりました。
- ・「コミュニティ」は**偶発的・意図的、意図が見え透いた瞬間魅力が失われる**ところはあるつつ、とはいえ継続持続するためには何かしらの意図が必要では、というセッションとても興味深かったです。

2) 【WS-1】この場の人たちとつながろう！

- ・It was super fun!!
特に、ネットワーキングの場から立ち去るところの**筋トレ**は実用的かつ、知りたいけれどなかなか教えてもらえない内容でしたので、懇親会の時には大活躍でした。
- ・自分自身が壁を作ってしまったただなんだ、と改めて認識できました。一番初めに、笑顔で、「こんにちは〇〇です！よろしくお願ひします。」とはっきりと言いながら話し始めてしまえば良いだけなんですよ！その日、早速実践して、ちゃんとコツをつかめた気がします。
- ・つながり方って、わかっていそうで意外とできないということに改めて気づき、それを訓練するというのも実はやったことがなくて、すごくいい経験でした。



3) 【TS-2】計画か？偶発か？企業経営者の判断軸

- ・自分自身の普段の行動と重ねて考えさせられました。計画的に偶発を導く判断、行動を意識して生きていく！
- ・『経営者然と振舞うこと』の意味が少しわかりました。計画は立てるが予定通りにいかないもの、誰かが小姑をやらないといけない、拡大や成長は企業としてマスト、合理的判断ではなく価値観、楽はたのしいorらく そのどちらか、といった言葉がととても残りました。
- ・お二人の話に激しく揺さぶられました。計画にしろ、偶発にしろ、強い熱意？エネルギーのようなものを感じ、それに心を動かされたのだと思います。
- ・最近自分は何を大事にして生きるべきか、何に心の炎を燃やすべきか、を考えていました。そんな中で、「マネタイズも大事。でも、本当に大事なのは、周囲を、自分を、エナジャイズし続けること。エナジャイズし続けられれば、マネタイズは必ず後からついてくる。」の言葉は私の心に響きました。
- ・今の自分がまさに迷っていたスケールアウト、スケールディープに関する考えをそれぞれ聞かせていただき参考になりました。

4) 【WS-2】ヒトからの学び方実験室

- ・問いの立て方というのは、その人の大切にしている価値観を反映するものなのですね。問いをたてることで自分にとって得たいものは何かという投げかけが、内省につながりました。
- ・いろいろなことを「計画的」「システムの」に進めることが正しい、と思っていたのでこの実験室の内容が私の考え方をを変えるきっかけになりました。
- ・「学び」はやはり「経験」なのかと感じました。その経験は自分自身の経験、体験だけでなく「いろいろな人」と接することによるその人の疑似経験や考え方の共有、またそれらからくる「新たな気づき」が学びの根幹ではないかと考えさせられました。
- ・「余白が大事」との言葉、余白があることによりいろいろなものを受け入れることで知識、教養が深まり、新たな気づきを生むと感じています

5) 【TS-3】クリエイティビティを高める偶発的な学び方～デザイナーの実践から学ぶ～

- ・普段日常的に目にするものも異なるアンテナを立てて物事の捉え方が変わり、それが新たな発想に繋がるのが学びでした。
- ・普段、自分が興味のないものに強制的に触れてみることの大切さは、カタチとしてのデザインもそうですが、経営にも必要なこと。計画的な偶発性は、簡単に日常に入れ込めると感じました。
- ・改めてデザイナーに限らず知的生産を営む者としてクリエイティビティは誰でも発揮できるものだし発揮するための努力をするべきだと感じました。誰でも発揮できるという意味では自分の資質を使うことでクリエイティビティを発揮すること。

6) 【WS-3】「AIとの付き合い方」実践編

- ・実際に会議でAIをつかってファシリしてみるという内容は試してみたことがなく、またその場で実践してみても面白かったです。
- ・新しい技術に対して各自試行錯誤している段階ですが、こうやってそれぞれにやっている知恵をシェアするにとどまるのではなくそういった知恵をもとに実践することですぐにその場からまたさらに一段階上の試行錯誤ができる、という点でもこのセッション楽しかったです。
- ・竹中さんの日々の問題意識のレベルが高いこと。AIの活用が独特でありながら実践しやすいもので、とても参考になりました。すでに使い始めています。



7) 【TS-4】勝ち負けの世界を生きたアスリートが引退後に生きる世界

- ・おっしゃっている角度や観点は異なれど、**利他の精神**と**自分と向き合うこと**を、清く強い精度でされていることが強さの秘訣だと感じました。
- ・人生の軸、収入の軸を失うという中で次なる目標を自分で決めて前に進むということは並大抵のことでは無いと思いますが、目の前のことに全力で向き合うからこそ様々な手段を考え、広がりが出ていくのだということを改めて感じました。
- ・アスリートのかたのジョブチェンジの観点は、他の職種の方でキャリアに迷われている方の背中を押されたように思いました。

8) 【WS-4】今いるメンバーで『大金星』を挙げるチームの法則

- ・**ストーミングは自然に起きるように起こすもの！集団的試行錯誤！**マネジャーをしているからには、主人公のような、人に力をみなぎらせる存在でありたい、と思い、本やいただいたお話と対話しながら、意義深い試行錯誤をしていかなければと思いました。
- ・チーム論を語るのであれば、**なぜ不協和音が生まれ調和に変わるのか**、人の心情に踏み込む必要がある。自らの経験をもっと語らないと絵にかいたモチになる。
- ・**衝撃的なセッション**でした。読書対話会は参加したことがありますが、なぜAIで読書をするという発想がなかったのか、とあらためて固定観念にとらわれている自分にも気が付きました。このセッションから結構ハマリ、AIプチ読書をしています。

9) 【WS-5】地域との「いい距離感」のつくり方

- ・古賀市をなんとか盛り上げたいというエネルギーを感じる事ができ、とても市役所の方とは思えない？オーラも凄い頼もしいものでした。早速市長のSNSもフォローし毎日更新する市長のエネルギーも凄いと感じます。
- ・実際に複業するということにはハードルの高さを感じていたのですが、普段使っている製品がどこで作られているか考えてみるところから地域とのつながりが出てきそうだと、**やれそうなことがふつふつと湧いてきました**。
- ・自分たちの提案が現実動き出す可能性があるからこそ、**発言や提案に対する責任**も感じました。想像するだけで終わらず、実現の可能性まで見据えて考えられたことが、この体験をより深く、現実味のあるものにしていただけたと思います。

10) 【WS-6】仕事を「面白がる」動機をつくれるのか

- ・グループセッションの際に、課題ってみんな同じなんだなと思いました。そんな人の課題にどう楽しみながら関わられるか、今のテーマなので考えることができました。
- ・**【自分の「感情」を起点に考える。】**が非常に刺さりました。異動してしばらく、感情に浮き沈みがあったものの、自分の感情に着目して「面白がる」までは昇華できていなかったことに気づきました。ポジティブであってネガティブであっても、感情を起点にしたら面白がれるかを探求していきます。

11) 偶発的オープンダイアログセッション

- ・みんなが主役！これだけ多様な疑問、掘り下げられる文脈が有る事が解っただけで人生に彩りがマシマシです！
- ・**面白がる**。この言葉で、クソ真面目にあらゆることを考え、新しいことにおびえていた自分の生き方が変わりました。今や私の人生の軸となっています。
- ・デザインされた偶発性（ヒトとの出会い）と、ファシリテーターごとに異なる問いという絶妙な設計のセッションでメチャクチャ面白かったです！「中動態」という意識してこなかった概念にも出会うことができ感謝です。
- ・興味の有無に関わらず、あえて決められた質問に答えてみるというのは新しい試みだと感じました。シンプルに楽しかったし、面白かった。その場にたまたま集まった人と、たまたま巡り会った時に向き合い対話するプロセスは、人によっては非効率とか無意味だという人がいるかもしれないけども、自分にとってはそれそのものが楽しく、不思議なことに「あ、今生きてる感覚ある」という感じすらした。



Cross Border Learning Fes. 2026

Thank You

—ご参加ありがとうございました



LINE

CBL、CrogaQの最新情報



Facebook

当日の様子・レポートの発信